



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

## 「孫悟空が生まれた国」②

毎日新聞 (2020-6-6) に、『地球の歩き方』40年という記事が載っていた。『歩き方』の親会社であるダイヤモンド社は、もともと経済誌などを出版する会社であったが、1969年にダイヤモンド・ビッグ社を新たに設立し就職情報や、学生の海外研修ツアーなどに手をひろげていた。出版社なのに旅行業をしていた。

時は正に「自由旅行」の時代がせまりつつあった。それに目をつけたのが初代編集長の安松清さんである。先見の明があった。旅行本だけではなく、大手旅行会社から零細旅行社までをまとめて、旅行業で大いに稼ぎまくった。

しかしベースは『地球の歩き方』という本なので、各国のシリーズをそろえていかなければならなかった。最初に「ヨーロッパ」編と「アメリカ」編が出版された。あのころは、憧れの海外旅行といえば欧米であった。まだまだインドやアジアに目を向ける若者は少なかった。それに旅の未開地なので旅のノーハウがなかった。

ところが南アジアに関しては、1978年『インドをあるく本』と『インド・ネパール旅カタログ<ライブ>』が出版されていた。この二冊を出版した小さな旅行社は因縁のライバル関係にあった。『あるく本』は土着的でバタ臭い印象、『旅カタログ』は精神世界好みの粋なデザイン編集であった。

わが輩が執筆に関与したのは、もちろんバタ臭い方で、勝負をするといつも『旅カタログ』に負けていた。なんと、わが愚妻までが『旅カタログ』の説明会に行く始末であった。愚妻はライバル社でインドに行こうとしていたのである。

(あのときは大恥をかいたよ)

負け惜しみかもしれないが『インドをあるく本』には、編集者大嶋賢洋のポリシーがあった。また、われらは豊富なインド旅の知識をもっていた。そこに目を付けたのが安松編集長であった。「インド」編の協力を受けたのは東京のメイト社代表のJMであった。ところが全情報を編集長に渡すということは、『あるく本』の廃版を意味した。それで彼は断ったが、編集長との関係はむしろ強くなった。彼の優秀な営業努力のお蔭である。

次に「中国」編を出版するのに、現地調査をしないかという話がJMに持ち込まれた。そ

れなら彼が行けばよいのに、なぜかわが輩にお鉢が回ってきた。

わが輩の内にむらむらとヒッピー魂が沸き起こってきた。荘子の国はどうなったのか。社会主義は成功しているのか。格差差別はないのか。盗人はいない、というのが本当か。ハエー匹いない、というのが本当なのか。人民は平等で平和に暮らしているのか。

この話は次号に続けるとして、結論から言おう。今や中国は孫子の“兵法”だらけになってしまった。

先日高野山でありがたい話を聞いてきた。

空海は唐の長安（西安）の青龍寺で密教を学びその根本道場を奥深い高野山に建てた。

社会主義では、宗教は迷信とされ仏教が弾圧され、僧は還俗させられた。その真言密教を中国から学びにきて、持ち帰る動きがあるそうだ。もっとも持ち帰っても、共産党の管理下におかれ布教の自由はないだろう。

真言密教には三業（身口意）という身体観がある。われわれ人間存在を身体と言葉と心に分ける。身体がなければ、言葉はない。言葉がなければ心を伝えることができない。心がなければ身体はただの物になってしまう。三つそろって人間といえる。それと対をなす概念に三密（身口意）がある。

三業は人間、三密は仏さまの身口意である。仏にも人間と同じ身口意がある。これは少し理解しがたいが、お坊さんに叱られるかもしれないが「理性」と考えたらよい。人間は三業（生存行為）と三密（理性）が合体してこそ真の「人間」といえる。

ところで身口意（しんくい）を早口で言うと「しゅうきんぺい」と聞こえないかい？

習近平主席が死ぬその瞬間、ガンディーの最期のように「おお、ラーマ神よ！」と神さま仏さまのことを想わないのだろうか。それほど社会主義の人間は強いものなのだろうか。確かに宗教は麻薬の一面があるかもしれないが、多くは人の心の救済（自由解放）である。

今や習近平主席の三業が三密と合体することを願うばかりだが、われらはとりあえず三密（密閉・密集・密接）と合体しないように注意して、コロナウイルス災禍に立ち向かおう。